

〈宝物特別調査〉

鳥の羽毛と文様

柿 澤 亮 三
平 岡 考
中 坪 禮 治
上 村 淳 之

1. はじめに

正倉院宝物にあらわれる鳥類に関する調査としては、過去に昭和28-30年度の材質調査⁽¹⁾がある。この調査は宝物の材質を動物質・植物質・鉱物質にわたって調べたもので、鳥類は山階芳麿が担当して宝物にもちいられた羽毛の同定がおこなわれた。この時の羽毛の調査は、彩絵水鳥形、箭、鳥毛屏風を対象とし、いくつかの注目すべき成果をあげたが、調査した箭や鳥毛屏風は全体の一部にすぎなかった。また宝物に描かれたり彫られたりしている文様にあらわれる鳥の図像にどのようなものがあるかについては従来総合的な調査はなかった。

今回の調査では、羽毛等の鳥の材料の用いられた宝物についてより幅広く材質を調査するとともに、鳥の図像のあらわれている宝物について種の同定を試みた。

2. 方 法

宝物を目視により観察して鳥の種を同定した。実地調査は平成8年10月21～25日と平成9年10月20～24日に正倉院でおこなった。実地調査によって同定に至らなかったものについて、写真により補充調査した。すなわち、鳥毛屏風の特徴的な羽毛および矢羽根については、写真を撮影し、山階鳥類研究所所蔵の研究用鳥類剥製標本と比較し同定した。文様については、既存の出版物に掲載された宝物の写真を参照して検討した。

2-1. 文様の同定の表示方法

文様はその性質上ある一種の鳥に絞りこむことが難しいばあいがある。そこで、文様の同定にあたっては、確度のランクづけと分類学上のグループ名による表示を試みた。

2-1-1. 確度のランクづけ

文様の同定は、その確度をA：確実、B：可能性が高い、C：可能性がある、の3段階に分けて評価した。すなわち、文様のある種と同定してそれにランクづけした時、Aランクであればその種であることが間違いない、Bはやや不明確ではあるもののほぼその種と考えられる、Cは不明確であるがその種である可能性もある（その種でない可能性も高い）、という意味で

ある。

2-1-2. 分類学上のグループ名による表示

同定が一種に絞りきれない場合、可能な限り分類学上のグループ名による表示をするようにした。たとえば、漠然と「キジ類」とするのではなく「キジ科」「キジ族」といった分類学上の名称を用いるようにした。これは、同定したグループに含まれる鳥の種の範囲をより明確にあらわすことが目的である。漠然と「キジ類」といった場合、ウズラが含まれるかどうか明確でないが、「キジ科」といえばキジ（キジ科キジ族）もウズラ（キジ科シャコ族）も含まれ、「キジ族」といえばキジは含まれるがウズラは含まれない。「科」「族」といった分類階級の名称については付録参照。

3. 結果と考察

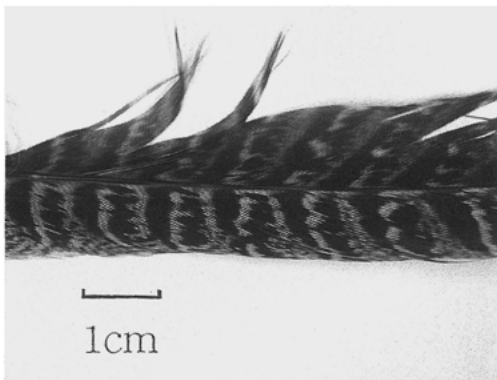
3-1. 材 質

矢羽根の調査結果（3-1-1）を表1に、矢羽根以外の材質の調査結果（3-1-2～3-1-8）を表2に示す。

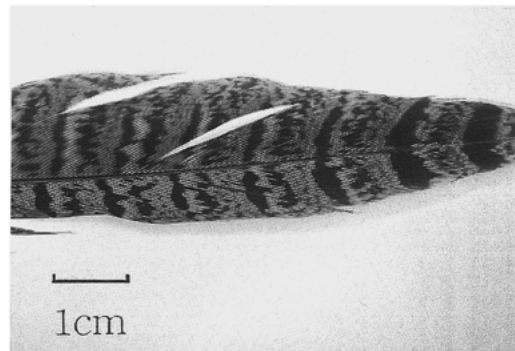
3-1-1. 胡禄付属箭（中倉4）・白葛胡禄付属箭（中倉5）・箭（中倉6）

正倉院宝物のオリジナルの箭と、箭（中倉6）付属の明治時代に制作された模造品について矢羽根につかわれた鳥の種類を調査した。

オリジナルの矢羽根は摩耗が著しくほとんど残っていないため、矢第40号（中倉6）（口絵1）をのぞいて同定は不可能であった。矢第40号のオリジナルの矢羽根の羽弁は、羽軸に沿ってわずかに残っているだけだが、間隔の狭い黒い横斑が規則的にならび、ひとつおきに羽軸に接するものと羽軸から離れているものの繰り返しになっているのがわかることからニホンキジ *Phasianus versicolor* の雌の尾羽（挿図1）と判断した。念のため大陸産のタイリクキジ *Phasianus colchicus* の中から中国中部産の亜種シナキジ *P. c. torquatus* 雌の対応する尾羽（挿図2）を比較したが、シナキジでは横斑の間隔が広く、一致しなかった。



挿図1 ニホンキジ（雌）尾羽（資料）



挿図2 タイリクキジ
中国中部産亜種（雌）尾羽（資料）

箭(中倉6)に付属する明治時代の模造品の矢羽根には、ニホンキジ *Phasianus versicolor*、ヤマドリ *Syrnaticus soemmerringii*、クマタカ *Spizaetus nipalensis*、オオタカ *Accipiter gentilis*、シロハヤブサ? *Falco rusticolus*、タンチョウ *Grus japonensis* またはコウノトリ *Ciconia boyciana* が用いられているのを認めた。また、^{ぼんぼり}雪洞といわれる飾り羽にカケス *Garrulus glandarius* の^{あまおおい}雨覆が用いられていた。

キジ雄の風切は矢第1号(模造品)ほかに用いられている。褐色の地に等間隔で切れ込みをいれたように三角形の淡色の斑がある特徴のある羽毛である。キジ雄の尾羽は矢第1号ほかに用いられており、灰色の地に黒い横斑が規則的にある。また、矢第3号(模造品)、第11号(模造品)のように尾羽の側面の羽毛を用いたものでは、灰色の地に黒い小斑点を散布し横斑が短いかまたはまったくない。これらの尾羽の色彩とパタンは、日本産のニホンキジのもので、このことから模造品の矢羽根のキジはニホンキジが用いられたと考えられた。

ヤマドリの風切は矢第2号(模造品)に用いられている。褐色の地に形の不明瞭なまだらの淡褐色斑が、キジ雄やキジ雌の風切の横斑より広い間隔でならんでいるのが特徴である。ヤマドリ雄の尾羽は矢第4号(模造品)ほかに用いられている。黒、赤錆色、橙色、小黑斑を散布するクリーム色、無斑のクリーム色の横斑が規則的にならんだ特徴的な羽毛である。これらのヤマドリの尾羽は黒線の前にはっきりとしたクリーム色があること、橙色が比較的淡くて赤錆色とのコントラストがあることから本州中北部産の亜種キタヤマドリ *S. s. scintillans* のものと考えられた。

クマタカの次列風切は矢第3号(模造品)、矢第9号(模造品)ほかに用いられている。褐色と淡色の繰り返しの横斑が羽軸寄りでは羽毛の基部方向に流れ、淡色斑が表面でも明瞭で、斑の間隔が幅広い(褐色斑の始まりから次の褐色斑の始まりまでが2cmを超え、しばしば3cmある)のが特徴である。クマタカの尾羽は矢第35号(模造品)と第43号(模造品)に用いられており、いずれも幼鳥のものであった。褐色と淡色の横斑は羽軸に直角で、褐色斑も淡色斑も比較的狭く淡色斑は幅1.5cm程度しかないことがクマタカの幼鳥の尾羽とよく一致した。これら2点の矢は『明治廿七年御物整理目録』では「クマタカメン」あるいは「鷓メン」とされている。クマタカは羽色に性差が少なく、成鳥の頭部は黒みがちであり幼鳥の頭部は白っぽいのが、明治時代に頭部の黒いものを雄、白いものを雌と考えていたために、クマタカ幼鳥の羽毛について「クマタカメン」等としてあるのかもしれない。

オオタカの尾羽は矢第22号(模造品)、第23号(模造品)ほかに用いられている。淡色と暗色の繰り返しの横斑が羽軸に直角で、淡色斑の幅が広いことが特徴である。矢第30号(模造品)の暗色斑・淡色斑とも幅の狭い羽毛はオオタカ幼鳥の最外側尾羽であった。

矢第21号(模造品)の白色でわずかな横斑のある矢羽根は、シロハヤブサの尾羽の内弁によく似ているが、山階鳥類研究所所蔵の標本には横斑の太さと間隔が一致するものがなかった。これはおそらくは単に個体の性別や年齢の差によるものと考えられるが、一応疑問符を付しておいた。

タンチョウまたはコウノトリの次列風切とした羽毛は矢第19号（模造品）、第20号（模造品）、第47号（模造品）ほかに見られる。これらは先端寄りが黒く、基部が白く、両者の間が灰色のグラデーションになって移行している。タンチョウとコウノトリの次列風切は色彩がよく似ていて矢羽根に仕立てた状態で目視では区別できなかった。

矢第42号（模造品）、第43号（模造品）では雪洞とよばれる飾りにカケスの初列雨覆が用いられていた。白、青、黒の細い横斑の繰り返しになっている特徴的な羽毛である。昭和28-30年の正倉院御物材質調査では第43号の羽毛について日本産のカケスとしているが、今回調査では比較標本と直接比較できなかったので産地まで再確認はできなかった。

矢第17号（模造品）ほかの『明治廿七年御物整理目録』に「鷹」としてある一様に灰色の矢羽根や、矢第36号（模造品）の「白鳥」としてある白色の羽毛、第58号（模造品）の「コウ」としてある全体に黒色の羽毛、などは特徴が乏しく同定できなかった。ほかに摩耗がいちじるしかったりきつい染色が施されたりして同定できなかったものがある。

『明治廿七年御物整理目録』に記載の模造品の名称と同定できた羽毛の関係を見ると、一部不明のものを除けば「雉」はキジ、「山鳥」はヤマドリ、「鷗」と「クマタカ」はクマタカ、「鷹」と「大鷹」と「大タカ」はオオタカであり、「風切」は初列風切、「母衣（ほろ）」は次列風切、「尾」は尾羽であって、目録の名称は実際の羽毛の種名および部位と一貫した対応を示している。

このことを考えれば、今回タンチョウまたはコウノトリとした矢羽根についても、目録で「鶴」の名称のあるものはタンチョウが、「コウ」の名称のものはコウノトリが用いられているものと推察される。また、不明としたもののうち、「鷹」の名称のあるものはマガンやヒシクイといったガン亜科の鳥が使われ、「白鳥」の名称のあるものはオオハクチョウないしコハクチョウが用いられている可能性が大きい。

なお、矢第40号のオリジナルの箭はキジ雌の尾羽が用いられ、模造品の矢羽根はキジ雄の尾羽が用いられているので、模造に際してはかならずしもオリジナルの矢羽根と同じ羽毛を用いているわけではないことが実物によって確認できた。

3-1-2. 鳥毛篆書屏風（北倉44）（口絵2、挿図3）

鳥毛篆書屏風は、各扇8文字の語句のそれぞれの文字を篆書と楷書で交互にあらわした屏風で6扇からなる。篆書の部分に鳥の羽毛が用いられているが摩耗が著しい。江戸時代になって元禄・天保の2度にわたって修理がおこなわれた。

鳥毛篆書屏風には、キジ雄の肩羽、キジ雌の肩羽と体羽、ヤマドリの体羽、マガモ属の体羽が用いられていた。



挿図3 北倉44 鳥毛篆書屏風 第4扇

第5扇「賢」字（挿図6）にはキジ雄の肩羽が見える。摩耗が著しいが、羽毛の中心部が黒く、黒の縁の内側を白線がめぐり、羽毛の先端に赤褐色の部分のある特徴的な羽毛（挿図7）で、ニホンキジ*Phasianus versicolor*の肩羽（挿図8）の特徴に一致する。念のためタイリクキジ*P. colchicus*のなかから中国中部産の亜種*P. c. torquatus*（シナキジ）（挿図9）、東北トルキスタン産の亜種*P. c. mongolicus*（挿図10）、アラル海南岸地方産の亜種*P. c. chrysomelas*（挿図11）の雄のそれぞれ対応する部位の羽毛と比較したが、いずれとも類似をみなかった。このことから、使用されているキジの羽毛はニホンキジのものと考えられた。昭和28-30年の材質調査でも、日本産のキジの肩羽が使用されていることが認められている。

第4扇「哲」字（挿図12）にはキジ雌の肩羽（挿図13）が見え、暗褐色の斑の先端に帯赤褐色の部分がある特徴のあるパターンが認められる（挿図14）。

第6扇「善」字（挿図15）には、キジ雌の翁の羽毛（挿図16・17）と下面の体羽（挿図18・19）が見える。

この他、第4扇「民」字（挿図20）には、山階鳥類研究所に保存されている山階芳麿のノートと草稿によると昭和28-30年の材質調査でヤマドリ胸部の羽毛とされたもの（挿図21）が見える。全体に赤褐色で羽軸に沿って淡いことからヤマドリ*Syrnaticus soemmerringii*の体羽（挿図22）と考えられる。

第5扇「惑」字などにはマガモ属*Anas*の雄の羽毛が見られる。白地に細かい黒の縞がはいっており、マガモ属すなわちマガモ、コガモ、トモエガモ、ヒドリガモ、オナガガモ等の雄で遠目に灰色に見える部分の羽毛と考えられるが、種の特定はできなかった。

鳥毛篆書屏風に見られる特徴的な羽毛のうち不明のものがいくつかある。例えば、前記の山階芳麿の資料によると第4扇「哲」字（挿図23）には山階がトモエガモ*Anas formosa*の上尾筒としたもの（挿図24）が見えるが、今回、剥製標本と比較しても同定できなかったため不明とした。第4扇「任」字（挿図25）には、羽弁が暗色で羽軸ぞいの淡色とはっきり分れた羽毛（挿図26）があるが同定できなかった。また、第1扇「無」字（挿図27）などの先よりと基部が暗色で中央が淡色の羽毛（挿図28）、第5扇「多」字（挿図29）などの淡色の地に微細な模様のある羽毛（挿図30）も同定できなかった。

なお、鳥毛篆書屏風の字の黒い縁取りに用いられた羽毛を昭和28-30年の材質調査ではニホンキジの上胸の羽毛としている。この部分については今回は実地に同定できな



挿図4 北倉44 鳥毛立女屏風 第2扇

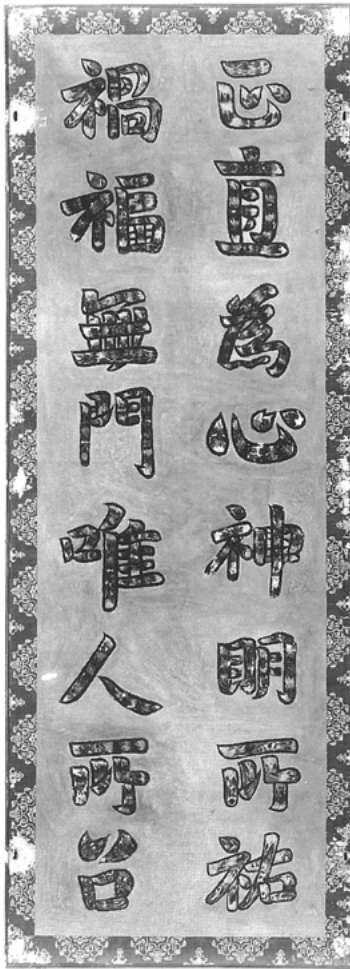
ったため不明としておく。ただし、写真を精査すると、ニホンキジの上胸とされた根拠である矢筈形のように見える部分もあるため、おそらくは昭和28-30年の同定は正しいものと思われる。

3-1-3. 鳥毛立女屏風および付属接扇其他残闕（北倉44）（口絵3、挿図4）

鳥毛立女屏風は、いわゆる樹下美人の図柄を描いた屏風で6扇からなる。描かれた女性の着衣や背景の岩石や樹木が鳥の羽毛で装飾されていたというが、現在は剥落してほとんど残っていない。

今回の調査では鳥毛立女屏風の羽毛は同定できなかった。昭和28-30年の材質調査では紫外線照射による蛍光の色彩が類似するという理由でヤマドリ（キジ）の羽毛であると結論されている。

付属の接扇其他残闕は鳥毛立女屏風に帰属するものかどうかは不明であるが、屏風のつなぎめ等の残闕で、羽毛のやや大きな断片が残っている。そのうちのひとつは、ニホンキジの雄の肩羽後部の羽毛であった。前記山階芳麿の資料によれば昭和28-30年の材質調査でも同じ羽毛を日本産キジの肩羽としている。



挿図5 北倉44 鳥毛帖成文書屏風
第3扇

3-1-4. 鳥毛帖成文書屏風（北倉44）（挿図5）

鳥毛帖成文書屏風は、各扇16文字の語句を鳥毛を貼った楷書であらわした屏風で6扇からなるが、鳥毛は磨耗が著しい。江戸時代になって元禄・天保の2度にわたって修理がおこなわれた。

鳥毛帖成文書屏風には、キジ雄の肩羽、キジ雌の肩羽、雨覆、体羽が用いられていた。

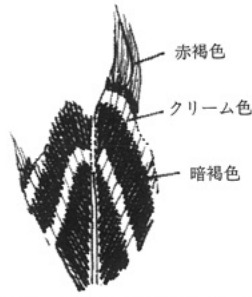
キジ雄の肩羽については鳥毛篆書屏風のものより保存のよいものがあり、羽毛の先端が矢筈形をなす独特の形のわかるものもある。ニホンキジの羽毛であることは鳥毛篆書屏風と同様である。

キジ雌の肩羽の羽毛は中央が暗褐色で羽軸部分が多少とも淡く、暗褐色に接して羽毛の先端部分に赤褐色の部分があり、羽縁はクリーム色の特徴ある羽毛である。キジ雌の翕の羽毛は暗褐色で羽縁と羽軸ぞいがクリーム色の羽毛である。第1扇「種」字（挿図31）にはキジ雌の雨覆（挿図32・33）が見られる。第3扇「禍」字（挿図34）には頸側から脇の羽毛（挿図35・36）が見られるが、前記山階芳麿の資料によると、昭和28-30年の材質調査でもキジ雌の腹側の羽毛としている。

鳥毛帖成文書屏風の羽毛のうち不明のものには、前記の山階



挿図6 北倉44 鳥毛篆書屏風 第5扇「賢」字部分(原寸)



挿図7 同左に見えるキジ(雄) 肩羽(描画)



挿図8 ニホンキジ(雄) 肩羽(資料)



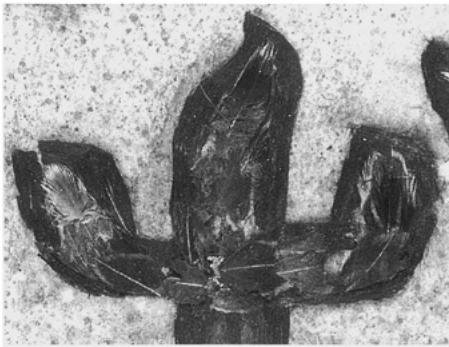
挿図9 タイリクキジ 中国中部産 亜種(雄)肩羽(資料)



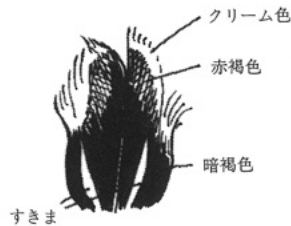
挿図10 タイリクキジ 東北トルキスタン産亜種(雄)肩羽(資料)



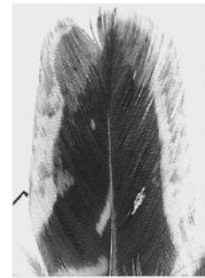
挿図11 タイリクキジ アラル海南岸産 亜種(雄)肩羽(資料)



挿図12 北倉44 鳥毛篆書屏風 第4扇「哲」字部分(原寸)



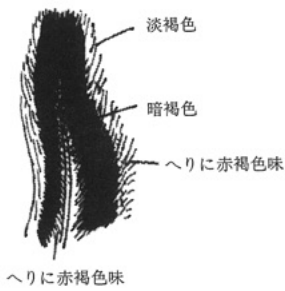
挿図13 同左に見えるキジ(雌) 肩羽(描画)



挿図14 ニホンキジ(雌) 肩羽(資料)



挿図15 北倉44 鳥毛篆書屏風 第6扇「善」字部分



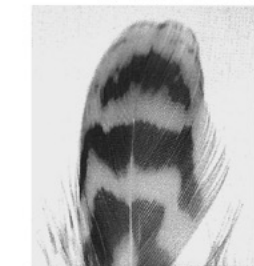
挿図16 同左に見えるキジ(雌) 翁の羽毛(描画)



挿図17 ニホンキジ(雌) 翁の羽毛(資料)



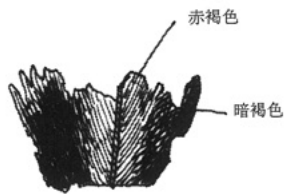
挿図18 同左に見えるキジ(雌) 下面の体羽(描画)



挿図19 ニホンキジ(雌) 下面の体羽(資料)



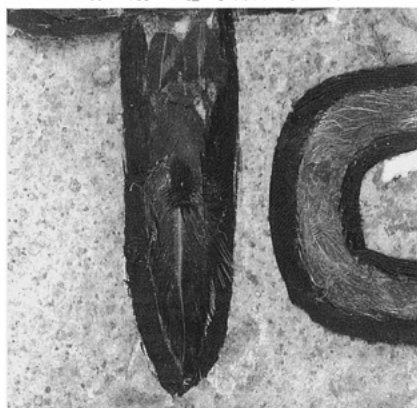
挿図20 北倉44 鳥毛篆書屏風 第4扇「民」字部分(原寸)



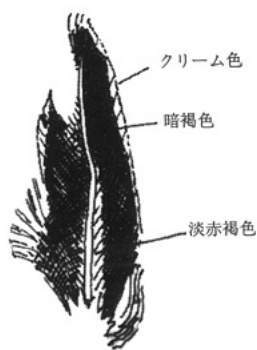
挿図21 同左に見えるヤマドリ体羽 (描画)



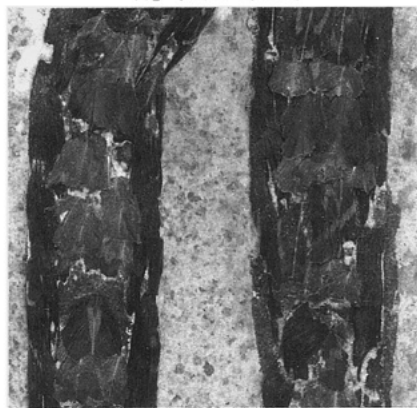
挿図22 ヤマドリ体羽(資料)



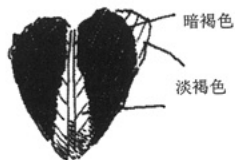
挿図23 北倉44 鳥毛篆書屏風 第4扇「哲」字部分(原寸)



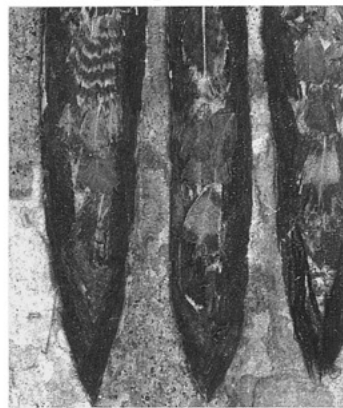
挿図24 同左に見える、かつてトモエガモ上尾筒羽毛とされたもの(描画)



挿図25 北倉44 鳥毛篆書屏風 第4扇「任」字部分(原寸)



挿図26 同左に見える不明の羽毛(描画)



挿図27 北倉44 鳥毛篆書屏風 第1扇「無」字部分(原寸)



挿図28 同左に見える不明の羽毛(描画)



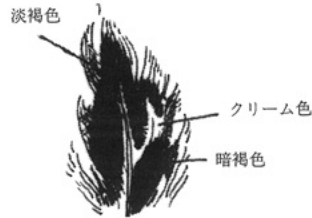
挿図29 北倉44 鳥毛篆書屏風 第5扇
「多」字部分 (原寸)



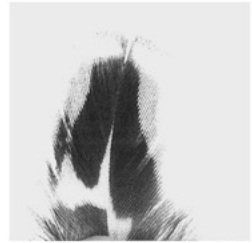
挿図30 同左に見える不明
の羽毛 (描画)



挿図31 北倉44 鳥毛帖成文書屏風
第1扇「種」字部分 (原寸)



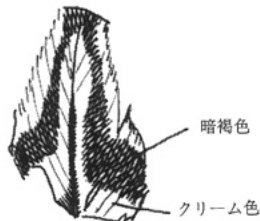
挿図32 同左に見えるキジ (雌)
雨覆 (描画)



挿図33 ニホンキジ (雌)
雨覆 (資料)



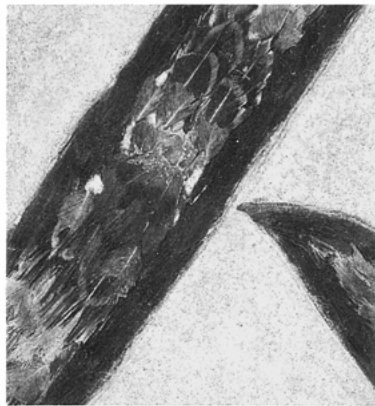
挿図34 北倉44 鳥毛帖成文書屏風
第3扇「禍」字部分 (原寸)



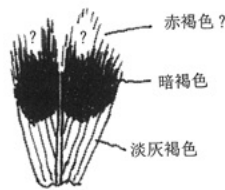
挿図35 同左に見えるキジの頸側
から脇の羽毛 (描画)



挿図36 ニホンキジの頸側
から脇の羽毛 (資料)



挿図37 北倉44 鳥毛帖成文書屏風
第3扇「人」字部分 (原寸)



挿図38 同左に見える、かつてヤマドリ
(雄) 前頸羽毛とされたもの (描画)



挿図39 北倉44 鳥毛帖成文書屏風 第5扇
「長」字部分 (原寸)



挿図40 同左に見える、かつてキジ(雌)
腹側の羽毛とされたもの (描画)

芳麿の資料によると昭和28-30年の材質調査でトモエガモの上尾筒とされた羽毛が第5扇「長」字にあるが、今回、剥製標本と比較したかぎりでは特徴が一致しなかった。また同じく第3扇「人」字(挿図37)にはヤマドリ雄の前頸の羽毛とされたもの(挿図38)があるが、これは剥製標本と比較した結果、黒斑が羽毛の基部までつながっていない点がヤマドリと異なるため不明とした。また第4扇「母」字のヤマドリの腰の羽毛とされた全体に白く見える羽毛も同定に至らなかった。第5扇「長」字(挿図39)の羽毛(挿図40)はキジ雌の腹側としているが、これも類似の羽毛が標本に見出だせなかった。

なお、昭和28-30年の材質調査でニホンキジの前頸とされた字の黒い縁取りの部分の羽毛について今回は不明としておくが、おそらく正しいと考えられることについては鳥毛篆書屏風と同様である。

3-1-5. 屏風2扇(南倉69)

鳥毛帖成文書屏風と鳥毛篆書屏風に類似のものそれぞれ1扇であるが、羽毛の同定はできなかった。

3-1-6. 彩絵水鳥形2枚(中倉117)

翼を広げたヤツガシラの形に切り取って、美しく彩色した2枚の小さな木板である。冠羽、広げた翼、尾に、横斑をあらわすようにカケス *Garrulus glandarius* の初列雨覆が用いられていた。白、青、黒の細い横斑の繰り返しになっている特徴的な羽毛である。昭和28-30年の正倉院御物材質調査では色調を根拠に日本産のカケスとしているが、今回調査では比較標本と実際に比較できなかったので産地の特定はさし控えたい。

3-1-7. 羽箒一枚（南倉174）

大きな鳥の初列風切を翼角部分から切って羽箒としたもので、基部を植物の葉で巻いて把手としてある。羽毛は磨耗が著しく、羽軸のみが残っている。羽軸は基部寄りが白っぽく先端寄りには黒っぽい。把手の植物質の破れ目から、第2掌骨第1指骨と第3掌骨第1指骨が見える。第2掌骨第1指骨の近位端から風切の先端までの長さは約48cmある。

研究用剥製標本を測定して比較すると、大きさの上からイヌワシ、オジロワシ等の大型のタカ科、マナヅル、コウノトリ等が可能性があると考えられたが、種の同定はできなかった。羽軸の先端よりが暗色であることから、初列風切の羽軸が先まで白いオオハクチョウ、コハクチョウ、タンチョウは該当しない。また、マガン、ヒシクイ、ダイサギ、アオサギ、ナベヅルなどは測定値が小さく該当しない。

3-1-8. 鳥3点（南倉174目録外）

鳥獣のミイラで骨と肉しかない。一点はやや大きな鳥の腰帯で、左脚の大腿骨、脛骨および跗蹠骨が途中までついている。一点は鳥の合仙骨付近の破片である。いずれも種の同定はできなかった。残りの一点は哺乳類の脚であった。

3-2. 文 様

3-2-1. 概 観

文様の調査結果は表3のとおり。文様中出现する鳥の一覧を表4に示す。このなかから同定の確度がA：確実、B：可能性が高い、のカテゴリーに入るものを抜き出すと、

(サギ科) サギ科、シラサギ属

(カモ科) カモ科、ガン亜科、カモ亜科、オシドリ、マガモ

(タカ科) クマタカ属

(ハヤブサ科) ハヤブサ科

(キジ科) シャコ族、キジ族、ニワトリ、タイリクキジ、キンケイ、マクジャク

(ツル科) ツル属

(インコ科) インコ科、ホンセイインコ属

(ヤツガシラ科) ヤツガシラ

(ツバメ科) ツバメ科

(カラス科) サンジャク

(水禽類、中型鳥、小禽類)

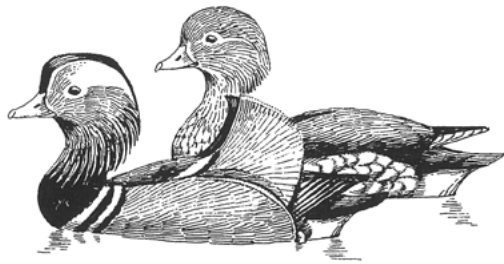
となり、基本的に限られた分類群の鳥が描かれていることがわかる。

描かれた鳥で特に目立ったのは、この中のオシドリ、キンケイ、マクジャク、ツル属、ホンセイインコ属、ヤツガシラ、サンジャク、および想像上の鳥である鳳凰（朱雀）であった。以下にこれらの鳥について順に考察する。

3-2-2. オシドリ *Aix galericulata* (挿図41)

オシドリはカモ目カモ科に属する水禽である。全長（平らな物差しの上に体を伸ばしてねかせた時の嘴の先から尾の先までの長さ）は43~51cm。雄の生殖羽は、きわめて装飾的で美しい。すなわち、頭部のシルエットは大きく丸く、頭部全体が独特の飾り羽になっており、後頭部で飾り羽のすそが後ろに流れるようになっている。目の周囲は白く、その白は後頭部の飾り羽のすそに向かって細くなる。胸側にははっきりとした横斑（水上または地上にとまっているばあい垂直になる線）が見え、背には橙色で扇形をした「银杏羽」があり、とまっている時はあたかもヨットの帆のように立っている。银杏羽は実際は翼の最も体に近い場所にある三列風切という羽毛である。雌は頭部の飾り羽や背の银杏羽を欠く地味な鳥だが、雄と同じく頭部が丸く大きいシルエットをしている。

オシドリは東アジア特産で、沿海州から中国東北部、サハリン、日本で繁殖し、冬は中国中南部、台湾、日本の本州以南に渡り越冬する^(2, 3)。山東、河北、山西、陝西、甘肅等の黄河流域の諸省では、春秋の渡り途上に観察される⁽⁴⁾。繁殖地は森林の溪流で、非繁殖期にはおもに岸に樹木の多い池や湖に棲む。



挿図41 オシドリ (資料)



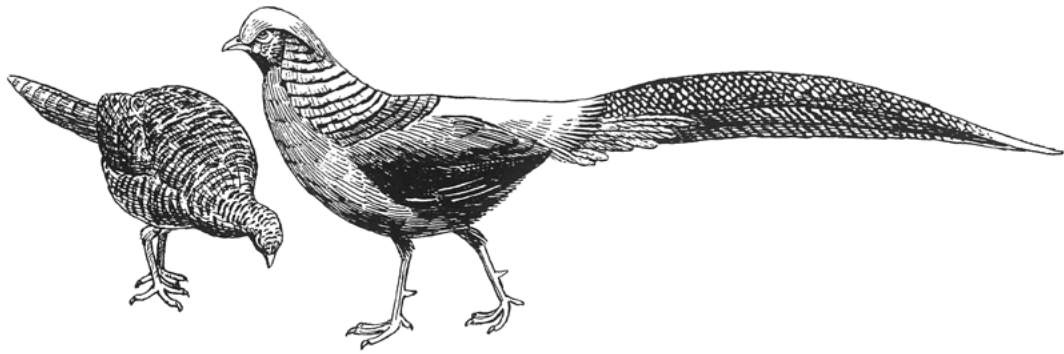
挿図42 南倉180 大幡脚端飾 第8号 (部分)

オシドリの文様は上記の雄の特徴のすべてまたはほとんどを備えた間違えようのないものが、紅牙撥鏤尺甲・乙（北倉13）、鳥花背円鏡第2号（北倉42）、密陀彩絵箱第15号（中倉143）、漆金薄絵盤甲（南倉37）、紫檀木面槽丹地騎獵捍撥琵琶第2号（南倉101）、雜葛形裁文第27号（南倉165）などをはじめとして多数見られる。中には大幡脚端飾第8号（南倉180）（挿図42）のように色彩もふくめて正確な文様もある。

瑤瑁螺鈿八角箱第19号（中倉146）では、頭部の飾り羽が図案化されて後頭部で内側にカーブしている。紺夾纈繩几褥第14号（南倉150）では银杏羽等の特徴を欠くが、丸くて大きい頭部からオシドリとした。

密陀絵盆第14号（南倉39）や漆皮八角鏡箱小第4号（南倉71）には、広げた翼の陰に银杏羽がのぞいてオシドリを思わせるが、ほかの部分にはオシドリらしい特徴がない水禽類の文様がある。

オシドリの文様には、山水鳥獸背円鏡第4号（南倉70）のように雄と雌のペアとして描いた



挿図43 キンケイ (資料)

と考えられるものがある一方で、紅牙撥鏤尺甲乙(北倉13)ほかいくつかの例ではペアで描かれていながら雄が並んでいるものがあった。

3-2-3. キンケイ *Chrysolophus pictus* (挿図43)

キンケイはキジ目キジ科(キジ族)に属する鳥である。全長は50~116cm。雄は装飾的な美しい色彩をしている。頭頂と冠羽は黄金色で、後頸をおおう頭巾のすそのような襟巻状の羽毛は橙黄色で黒色の横斑が同心円状にある。翁は緑、肩羽はあずき色、腰は黄色でたたんだ翼は暗青色、体下面は赤朱色である。尾は長く暗褐色の地に淡色の小斑を散布し、基部の両側を縁どるように赤い上尾筒の羽毛がある。



挿図44 北倉28 紅牙撥鏤撥 (部分)

キンケイは中国の特産種で、中国中部内陸の山地に分布し、笹などの密な下生えのある山地の斜面や溪谷に棲む^(5, 6)。同じキンケイ属の種にはギンケイ *Chrysolophus amherstiae* があり、形態は全体の体型から冠羽、襟巻状の羽毛などまでキンケイとよく似ているが色彩がことなり、襟巻状の羽毛は白に黒色横斑で尾は小斑を散布せず白くて黒色横斑がある。分布はキンケイの分布に接してその南西にあたり、中国の四川、雲南、貴州からビルマにおよぶ^(5, 6)。

キンケイの文様でよく特徴をとらえているものは紅牙撥鏤撥(北倉28)(挿図44)、曝布彩絵半臂第9号(南倉134)に見られる。前者では黄色の冠羽と黄色の腰をしめすように冠羽と背中が白く、水玉模様で尾のパターンを示している。後者は冠羽と後頸の襟巻状の羽毛を示し、体下面の赤と長い尾の基部の赤い上尾筒をしめしてリアルである。鳥草夾纈屏風第2扇(北倉44)は、図案化が進んでいるものの、冠羽、襟巻状の羽毛、尾の水玉模様を示してキンケイを描いている。鳥草石夾纈屏風第1扇(北倉44)では体型はキジ族で、淡色の冠羽と体に赤が多いことからキンケイを連想するが、かならずしもキンケイの特徴に忠実ではない。特徴のはっきりしない文様は数多い。金銀平文琴(北倉26)に描かれた鳥には単に冠羽があり、尾が長い

というだけのものがあり、不明鳥（サンジャクC、キンケイC）とした。なお、今回の調査では、キンケイ属と考えられるもので特徴のはっきりしているものはすべてキンケイで、ギンケイと考えられるものはなかった。

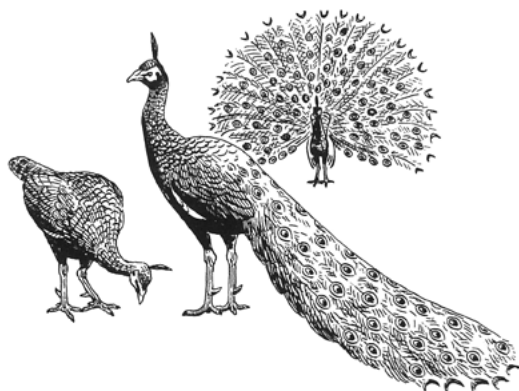
3-2-4. マクジャク *Pavo muticus* (挿図45)

マクジャクはキジ目キジ科に属する。全長は100~240cm。雄の体は全体に緑色で、たまただ翼は暗青色で初列風切は栗褐色である。頸から胸の羽毛は縁が黒く、鱗状に見える。頭頂から一束になって直立する冠羽があり、先端は先細りに尖っている。いわゆる「尾」は尾羽の上を覆う上尾筒の伸長したもので、緑色で、特徴ある眼状紋があり、扇形に広げることができる。

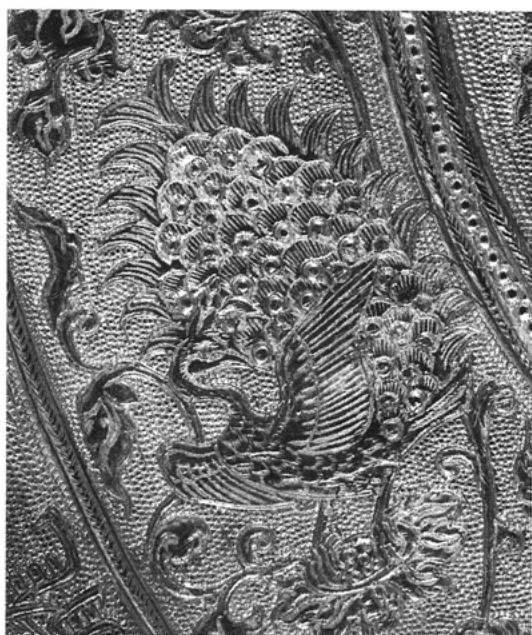
マクジャクはインドシナ半島全部からアッサム東部、中国の雲南省南部、マレー半島とジャワ島に分布し、森林に棲む。^(5, 6) 同属クジャク属の種にインド亜大陸にすむインドクジャク *Pavo cristatus* がある。インドクジャクの冠羽は先細りに尖らず扇形で、各羽の基部は羽弁がなく羽

軸のみである。また、雄の体は青く頸の羽毛は鱗状に見えない。

特徴のよく整ったマクジャクの文様は、鳥花背円鏡第2号（北倉42）、金銀山水八掛背八角鏡第1号（南倉70）（挿図46）、孔雀文刺繍幡残欠第1号（南倉180）などに見られる。金銀平文琴（北倉26）、密陀絵盆第9号（南倉39）、白椽綾錦几褥第30号（南倉150）、赤漆櫃（南倉170）では冠羽に現実にはない眼状紋があって図案化しているが、インドクジャクのような扇形をしていないのでこれらもマクジャクとした。図案化は冠羽ばかりでなく、金銀山水八掛背円鏡第1号（南倉70）に見られるような、猛禽のように鉤形になった嘴や、現実以上にしなやかに波打った「尾」などにも見られる。密陀絵盆第9号（南倉39）では、冠羽には眼状紋があって図案化がみられるものの、顔の表情、頸から胸への鱗模様を含め全体にリアルに描かれている。鳥獣花背円鏡第9号（南倉70）の鳥も冠羽がない以外は束になってまっすぐな「尾」の量感などにクジャクの特徴がよくあらわれているし、体の鱗状の斑からマクジャクとしてよいであろう。銀平脱八角鏡箱第1号（南倉71）の鳥



挿図45 マクジャク（資料）



挿図46 南倉70 金銀山水八掛背八角鏡 第1号（部分）

は図案化が進んでいるが冠羽の形からマクジャクであろう。今回の調査ではインドクジャクと考えられる文様はなかった。鳳凰との関連については「3-2-9. 想像上の鳥」を参照。

3-2-5. ツル属 *Grus* spp. (挿図47)

ツル属は、ツル目ツル科にぞくする仲間で世界に10種あり、ユーラシア大陸にはオオヅル、マナヅル、ソデグロヅル、カナダヅル、タンチョウ、ナベヅル、オグロヅル、クロヅルの8種^(7, 8)が分布する。全長は約90~150cmで、120~130cm前後のものが多い。嘴、頸、脚の長い水鳥でおもに沼沢地に棲む。

ツル属と考えられる文様は、嘴、頸、脚が長く、頭部が丸い。漆背金銀平脱八角鏡（北倉42）、雲鳥飛仙背円鏡第17号（北倉42）、銀平脱鏡箱第2号（南倉71）などに見られる。金銀平文琴（北倉26、表面頭部の最上端で、吹流しをもった仙人を乗せている図）、や紅牙撥鏤尺第4号（中倉51）では、額から頭頂の帽子状の裸出部、頸の塗り分けになったパタン、伸長した三列風切が描かれ、クロヅル *Grus grus* あるいはタンチョウ *Grus japonensis* を思わせる。前者の文様では尾が房状に伸長した図となっているが、これはツルが翼をたたむと伸長した三列風切が尾の上をおおうため、あたかも尾が伸長しているように見えることから起こる誤解で、後代の絵画でもしばしば見られる。



挿図47 クロヅル（資料）

漆櫃第1号密陀絵雲鳥草形（南倉168）（挿図48）の片方の短側には、ツルの「鳴き合い（ユニゾン・コール）」と呼ばれるディスプレイの行動がきわめてリアルに描かれている。文様では1羽しか描かれていないが、この行動はつがいの雌雄が向かい合って嘴を上に向けて鳴き交わすものである。

なお、嘴、頸、脚が長い水鳥としては、コウノトリ科、サギ科がある。これらは外見は一見ツル科に似ているが、分類学上の類縁は遠い。コウノトリ科はツル科に比べ、嘴がより長大で太いのが特徴だが、今回の調査ではコウノトリ科と考えられる文様はなかった。サギ科と考えられる文様は馬鞍第5号（中倉12^{なめ}麿脊）や密陀



挿図48 南倉168 漆櫃 第1号 密陀絵雲鳥草形（部分）

絵盆第13号（南倉39）に認められた。これらは頭が丸くなく、冠羽があり、頸がZ字形に屈曲するといった点からサギ科と考えられた。

3-2-6. ホンセイインコ属 *Psittacula* spp. (挿図49)

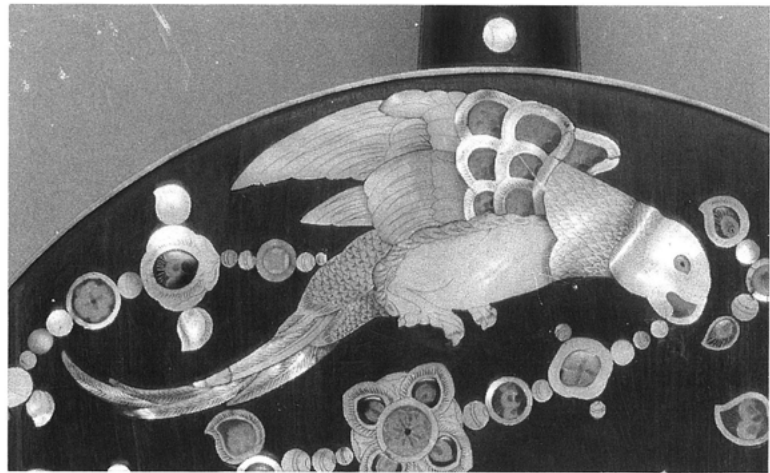
ホンセイインコ属はオウム目インコ科にぞくする仲間世界に15種（うち2種は絶滅）ある。全長は約30～60cmで40cm前後のものが多い。形態はすべての種でよく似ており、嘴は鉤形に曲がり、体は細く、翼は細く先端が尖り、尾が長く尖る。飛翔時は細く尖った翼と細く長い尾があり全体にスマートに見える独特の形をなす。体色は多くの種で黄緑色を主とする。全ての種で下嘴のつけねに黒斑があり、種によっては黒斑が楔形に頸側に回り込んだり、頸を一周する細い頸輪をなしたりしている。種によっては上嘴と下嘴の色がことなるもの（たとえばダルマインコでは上嘴が赤く下嘴が黒い）や、翼は緑で小雨覆だけ赤いもの（たとえばオオホンセイインコ）などがある。属としての分布はインド亜大陸、インドシナ半島、中国南西部、マレー半島、ボルネオ、スマトラ、ジャワおよびインド洋のいくつかの島嶼で、一種のみがアフリカ大陸中部にも分布する。森林、疎林、村落周辺の樹木のある耕地や植林地などに生息する⁽⁹⁾。

ホンセイインコ属と考えられる文様は、尖った長い尾、尖った翼、鉤形の嘴、嘴基部の黒斑があるもので、木画紫檀碁局（北倉36）などに見られる。碧地金銀絵箱第25号（中倉151）、密陀絵盆第3号（南倉39）では体全体に現実にはない斑点が描かれているがそれ以外はホンセイインコ属の特徴をあらわしている。螺鈿紫檀五絃琵琶（北倉29）裏面の文様は胸に実際にはないバンドが描かれているが全体にホンセイインコ属の特徴をよくあらわしている。螺鈿紫檀阮咸（北倉30）（挿図50）は、全体の形はよく特徴を捉えているが、下嘴つけねの黒斑は表されて

いない。ただし、上嘴のみ赤い、雨覆が赤いといった一部のホンセイインコ属の種に見られる特徴を描いているように見える。銀平脱合子（北倉25）は、嘴付近に黒斑を描いているが、黒斑の場所と形が崩れている。花鳥背八角鏡第14号（北倉42）は、きわめて図案化されているが、嘴基部に黒斑をあらわしているように見



挿図49 オオホンセイインコ（資料）



挿図50 北倉30 螺鈿紫檀阮咸（部分）

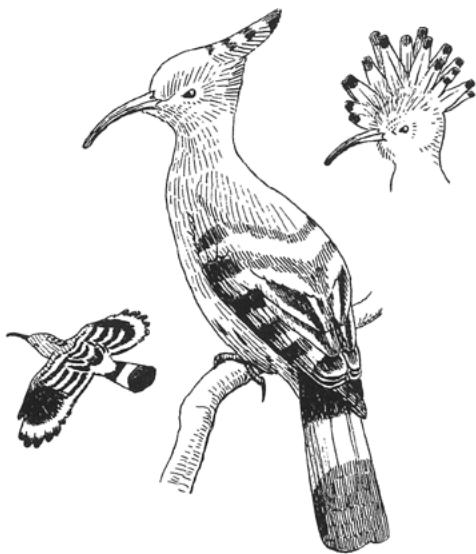
え、体型もホンセイインコ属の特徴をあらわしている。鳥獣背八角鏡第1号（北倉42）では、体型がやや寸詰まりで、ホンセイインコ属から多少遠ざかった印象だが、図案化されながらも嘴基部に黒斑を描いているように見えるため、インコ科A（ホンセイインコ属C）とした。

ホンセイインコ属の文様には種まで同定できるものはなかった。また、オシドリやヤツガシラの文様のように色彩・形態ともに実際の鳥を細部までよく描写しているものはなかった。これは宝物の制作地がオシドリやヤツガシラは分布するがホンセイインコ属は分布しない場所であることを示唆するものであるかもしれない。

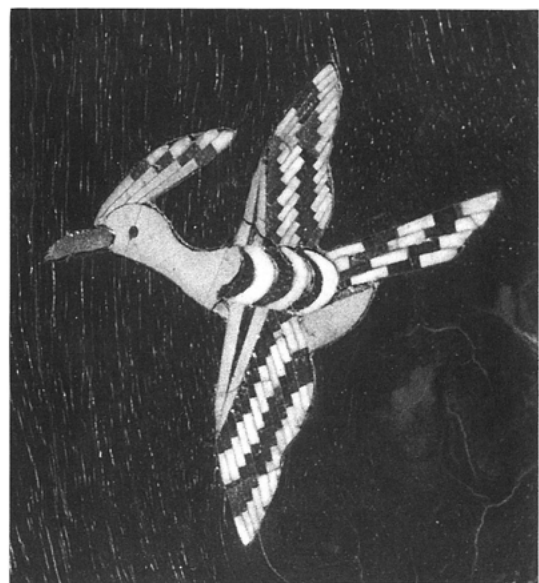
なおこのホンセイインコ属の文様は「鸚鵡」と呼ばれている。これは唐代のこの仲間の呼称なのであろう。現在の鳥類学ではオウムとインコの仲間であるオウム目はヒインコ科、オウム科、インコ科の3つのグループに分けられ、ホンセイインコ属はインコ科に属するが、オウムとよばれる鳥はオウム科に多い（オウム目をインコ科1科としヒインコ亜科、オウム亜科、インコ亜科にわける考え方もある^(9, 10)）。

3-2-7. ヤツガシラ *Urupa eupops* (挿図51)

ヤツガシラはブッポウソウ目ヤツガシラ科に属する陸鳥で、全長約26cmある。形態と羽色はきわめて特徴的で、体は橙色で風切、背、尾は黑白のはっきりした横斑になっている。冠羽があり、たためば束状になるが広げると扇形になる。冠羽の各羽毛は橙色で先端には黒斑があり、たたむと橙と黒のまだらに見える。嘴は細長くわずかに下曲する。分布は沿海州、朝鮮半島、中国、インドシナ半島から南アジア、中央アジアをへて西アジア、ヨーロッパ大陸までのユーラシアの温帯以南とアフリカに広く分布し、主に裸地のあるような開けた乾燥地を好み、村落の周辺にも棲む⁽¹¹⁾。日本ではごくまれな旅鳥で稀に春の渡りのさいに観察されるが、近年では散発的に繁殖例も知られる⁽¹²⁾。



挿図51 ヤツガシラ (資料)



挿図52 南倉101 紫檀木画槽琵琶 第2号 (部分)

ヤツガシラの文様は、細い嘴と扇形の冠羽および横斑のある翼、背、尾をあらわした間違えようのないものが、紅牙撥鏤尺（北倉13）、緑牙撥鏤尺（北倉14）、紅牙撥鏤碁子（北倉25）、馬鞍第5号（中倉12）、紅牙撥鏤尺第1号・第2号（中倉51）、碧地金銀絵箱第24号（中倉151）ほかに多く見られる。木画紫檀双六局（北倉37）、紫檀木画箱第18号（中倉145）、紫檀木画槽琵琶第2号（南倉101）（挿図52）には、体が橙色で背、翼、尾などが黒と白で作られた、色彩まで実際に近いものが見られる。山水花虫背円鏡第18号（北倉42）や漆胡瓶（北倉43）のものは上面の横斑がほとんどまたはまったくないが、形態からヤツガシラとした。ヤツガシラの文様は全体に特徴をよく捉えたものが多く、別の鳥との中間的特徴をもつような同定に迷うものは少なかった。鳥獣花背八角鏡第12号（南倉70）に描かれたものは、嘴が長くなく、冠羽が短く、頸が長く体のプロポーションが水禽類を連想させたが、2羽描かれたうちの1羽には背と尾に横斑が描かれているため、ヤツガシラB-Cとした。

ヤツガシラは、きわめて特徴的な形態と羽色のために、古代エジプトや古代ギリシアをはじめとして古くから世界のさまざまな文化において図像があらわれ、言及されてきた。文化によっては、不潔な鳥あるいは不吉な鳥として扱われている⁽¹⁴⁾。これは、巣が不潔であったり、ヒナが臭気のある分泌物を出したり排泄物を外敵にあびせたりする習性に一因があるらしい^(11, 13)。しかし正倉院宝物の世界では、ここに見たように本種の文様が他の装飾的な羽衣をもつ鳥類とならんで頻出し、否定的なイメージはまったく感じられない。

3-2-8. サンジャク *Urocissa erythrorhyncha*（挿図53）

サンジャクはスズメ目カラス科に属する陸鳥で、全長は約65-68cmある。頭部は黒く、頭頂から後頸にかけて白い冠羽がありやや帽子状に見える。腹は白く、体上面と翼と尾は淡青色をしている。尾が長く先端はやや下向きにじだれて見える。尾羽は中央から側面になるに従って徐々に短くなっている。それぞれの尾羽の先端には白斑がありその内側に黒斑があるので、尾を側面から見たり、尾を広げた場合、尾のへりが白い斑で段々に見える。嘴と脚は赤い。中国



挿図53 サンジャク（資料）



挿図54 北倉150 花氈 第5号（部分）

中南部からインドシナ半島をへてヒマラヤ南麓に分布し、森林に棲む。同属の近縁種にキバシサンジャク *Urocissa flavirostris* があり、サンジャクとよく似ているが頭部の白斑の形が異なるため帽子をかぶったようには見えず、また嘴が黄色い。キバシサンジャクの分布はヒマラヤ南麓から帯状にビルマ北部、中国雲南省、ベトナムの北西部に及び、サンジャクよりも高い標高⁽¹⁵⁾に分布する。

サンジャクの文様でよく特徴をとらえたものは花氈第5号（北倉150）（挿図54）に見られる。朱色の嘴、黒い顔、帽子状に白い頭部、淡青色の体、中央尾羽が長く下にしだれ側方の尾羽は徐々に短くなっているなど、サンジャクの特徴をよくあらわしている。紅牙撥鏤尺甲（北倉13）の鳥も頭頂のパターンや尾羽の形状からサンジャクと考えられる。サンジャクとした文様の中には銀平脱合子（北倉154）、密陀彩絵箱第15号（中倉143）、紫檀木画槽琵琶第2号（南倉101）に見られるように体型からサンジャクの名を挙げてあるが、色彩ないしパターンの特徴のはっきりしないものが数多く含まれる。そういったものから碧地金銀絵箱第24号（中倉151）にあるようなただ尾の長い鳥としか言いようのない文様まで連続して存在する。こういった特徴のはっきりしないものの中には同様に尾の長いキジ族やホンセイインコ属の特徴のはっきりしないものとの移行形と思われるものもあった。

なお、特徴のはっきりしたものでキバシサンジャクと考えられるものはなかった。

3-2-9. 想像上の鳥

想像上の鳥の同定ないし図像学は、自然科学の範囲を超えたところにある。今回の調査では、実在する鳥と考えられないものは、「想像上の鳥」とした。そして、仮に鳳凰と迦陵頻伽と考えられるものについては括弧内にその旨記し、それ以外のものは括弧内に具体的形態を簡単に記した（表3・4）。

鳳凰としたものの中には脚がやや長めで頑丈で距をもち装飾的な尾羽を見せて、地上性のキジ科であることを強く感じさせるものから、嘴が頑丈で鈎形に曲がりむしろタカ科の猛禽類を連想させるものまでいくつかのパターンがあった。

一般に鳳凰の文様にはクジャクの要素が入っているとされるが、今回の調査で見ると似ていたものに似ているものもあったが、鳳凰とするかクジャクとするかで迷うような文様はなかった。鳳凰としたものでは尾がまっすぐなものはなくしなやかに波打っており、尾の眼状紋を欠き、頭頂から立った一束の冠羽ではなく、多くは耳状の二束の冠羽をもち、頸に鱗模様はないなどの違いがあった。すなわち、鳳凰とクジャクの文様は明らかに異なった特徴のセットを持っていた。このように宝物の制作者たちは鳳凰とクジャクを明らかに別のものとして区別していたと考えられ、単純にクジャクの文様が乱れて鳳凰になったとするのは早計のように思われる。

鳳凰はキジ目キジ科のカムリセイラン *Rheinardia ocellata* がモデルであるという説がある^(16, 17)。その説は単に形態の類似だけをその根拠とするのではなく、鳴き声も根拠にしている。カムリセイランの声はセイラン *Argusianus argus* に似ており、セイランの雄はhow-howと、雌は

how-owoo, how-owooと繰り返して鳴くという。その鳴き声が鳳凰の名前の由来であるという。カンムリセイランはベトナム中部とマレー半島に分布し、森林に棲む^(5, 6)。セイランは、マレー半島、ボルネオ、スマトラに分布する^(5, 6)。

3-2-10. 文様のまとめ

宝物の文様に描かれた鳥は、すでに述べたようにオシドリ、キンケイ、マクジャク、ツル属、ホンセイインコ属、ヤツガシラ、サンジャク、鳳凰（朱雀）などが目立つ。これらを見て感じるのは、

- a. 目立った冠羽のあるもの
- b. 尾羽の長く美しいもの
- c. 色彩の顕著なもの

への偏りである。こういった美しい鳥への目立った偏りからは、制作者が一種の樂園ないし別天地の情景を描き出そうとしているように感じられ、興味深い。

また、明らかな海の鳥（シギ科、チドリ科、カモメ科、ウミスズメ科、ミズナギドリ科など）が出現しないのも特徴的である。分類群のはっきりしない水禽類は出現するが、これらは河川や湖沼性のガンカモ類（カモ科）やウ類（ウ科）である可能性が大きく、明らかな海の鳥と考えると説明できないものはない。鏡の図案には海を思わせるような波のある広い水面が描かれているものがあるが、それらにも海の鳥は出てこない（金銀山水八卦背八角鏡（南倉70）にはウミスズメ科Cとした鳥があるが、これは評価Cで、ウミスズメと見て見えなくはないという程度のものである）。宝物の制作者の念頭には主に陸棲の鳥と内陸性の水禽のみがあり、海岸や海洋性の鳥については具体的イメージを持っていなかったものと考えられる。

正倉院は、シルクロード、すなわち西アジアからトルキスタンを経て、途中インドからの道をあわせて中国にいたる全行程の影響を受けた文物の集積所であることが、漆胡瓶（北倉43）のスタイルや銀壺（南倉13）のパーティアンショットの図像など多くの根拠から説明される。

しかし、今回筆者らが見た限りでは、鳥の文様のなかに明らかに西アジアやトルキスタン、インドに特産のものは見いだせなかった（全ユーラシアに広く分布するヤツガシラや、インドからインドシナ半島・中国南部に分布するホンセイインコ属のように、それらの地域も含めて分布する鳥はあった。しかし、宝物の文様にインドクジャクがまったく出てこないことから、ホンセイインコ属についてはインドシナ半島から中国南部のものを描いたと考えるのが自然であろう）。

描かれた鳥は結局、オシドリ、キンケイ、サンジャクのように中国の鳥が多く、これにホンセイインコ属、マクジャクというインドシナ半島の鳥が加わっている（このうちオシドリのみは日本にも分布する）。

これらの中国、インドシナの鳥のうちリアリティーに勝るのは中国産のオシドリ、キンケイ、サンジャクであり、インドシナ産のホンセイインコ属、マクジャクはリアリティーにおいて劣

る。ヤツガシラも中国産と考えればこの傾向は一層強く感じられる。すなわち、ヤツガシラ、オシドリ、キンケイ、サンジャク等は色彩、形態ともに細部まで実物に近く描かれたものが見られ、ことにヤツガシラ、オシドリの文様にリアルなものが多い。これに対し、ホンセイインコ属、マクジャクでは（間違えようのない特徴はそなえているものの）そういったものが少ない。調査した範囲ではホンセイインコ属もマクジャクも正確に彩色された文様はなかったし、細部の正確さもやや劣っていた。たとえばホンセイインコ属では種の同定ができるような正確さをもっているものはなかった。マクジャクはリアルに描かれているものがあったが、そういったものでも冠羽に現実にはない眼状紋があったり、嘴が猛禽のように過剰に鉤形をしているなど、どこかしらに図案化が見られるものが多かった。

なお、中国産のキンケイとサンジャクについては、キンケイに対してギンケイ、サンジャクに対してキバシサンジャクという近縁の別種がより奥地に分布するが、これら奥地の鳥は描かれていなかった。

宝物の制作地は、もちろん1箇所とはかぎらないわけだが、こうして宝物の鳥の文様の全体の傾向を見てみると、宝物の制作の大きな中心が中国の文明地域にあったことは確からしく思われる。ホンセイインコ属やマクジャクにやや正確さを欠いたものが多いことは、制作地がそれらの鳥の分布地であるインドシナ半島から離れていたことを物語るのであろう。また、オシドリ、キンケイ、サンジャクが描かれている一方、ギンケイ、キバシサンジャク等が描かれていないことは、宝物の制作者が、エキゾチックなあるいは装飾的な題材を珍重する一方で、中国でわりあい身近な鳥のなかに材料をとっていたことを示すのであろう。

4. おわりに

正倉院宝物の中には、一連の鳥毛屏風をはじめとした鳥の羽毛を用いた製品があるほか、文様に鳥が描かれているものは数多い。今回、これらの宝物を一点一点まのあたりにして調査することができたのは実に得がたい体験であり、ここにその成果を報告できることを喜ぶものである。ただし、調査すべき宝物の点数がきわめて多かったために、個々の宝物について必ずしも十分な時間をとって検討する余裕がなかった。同定について思い違い等があるのではないかと恐れるものである。また本稿をまとめるにあたって十分に議論をつくして練り上げることができたとは言いがたく、各種の興味深いトピックについても、必ずしも深く掘り下げることができなかった。本稿はあくまでひとつの調査結果をまとめたものであり、今後の調査研究に待つ部分を多く残しているものであることをご了解いただきたい。

末筆になったが、米田雄介前正倉院事務所長、櫻山和民正倉院事務所長、ならびに正倉院事務所職員の皆様には、実地調査中からまとめの期間を通じ、ひとかたならぬご支援をいただき、また有益なご助言をいただいた。ここに記して深く感謝の意を表したい。

引用文献

- (1) 大賀一郎ほか 1957 「昭和28-30年正倉院宝物材質調査」『書陵部紀要』第8号
- (2) P. A. Johnsgard, 1978. *Ducks, Geese, and Swans of the World*. University of Nebraska Press, Lincoln and London.
- (3) 黒田長久・森岡弘之 1980 『世界の動物 分類と飼育』⑨〔ガンカモ目〕東京動物園協会
- (4) Chen, Tso-hsin, 1987. *A Synopsis of the Avifauna of China*. Science Press, Beijing. (鄭作新『中国鳥類区系綱要』)
- (5) P. A. Johnsgard, 1986. *The Pheasants of the World*. Oxford University Press, Oxford.
- (6) 黒田長久・森岡弘之 1987 『世界の動物 分類と飼育』⑩ I〔キジ目〕東京動物園協会
- (7) P. A. Johnsgard, 1983. *Cranes of the World*. Indiana University Press, Bloomington.
- (8) 黒田長久・森岡弘之 1989 『世界の動物 分類と飼育』⑩ II〔ツル目〕東京動物園協会
- (9) J. M. Forshaw and W. T. Cooper, 1989. *Parrots of the World*. 3rd. ed. Lansdowne Editions, Sydney.
- (10) 山階芳麿 1986 『世界鳥類和名辞典』大学書林、東京
- (11) J. M. Forshaw and W. T. Cooper, 1993. *Kingfishers and Related Birds. Leptosomatidae, Coraciidae, Upupidae, Phoeniculidae*. Lansdowne Editions, Sydney.
- (12) M. Brazil, 1991. *The Birds of Japan*. Christopher Helm, London.
- (13) C.H.Fry, 1985. Hoopoe. In B.Campbell and E.Lack (eds.) *A Dictionary of Birds*, T & AD Poyser, Calton.
- (14) 荒俣宏 1987 『世界大博物図鑑』第4巻〔鳥類〕平凡社、東京
- (15) S. Madge and H. Burn, 1994. *Crows and Jays*. Christopher Helm, London.
- (16) 蜂須賀正氏 1924 「鳳凰とは何か (鸞その他について)」『鳥』4 : pp.110-120.
- (17) 高島春夫 1955 『動物渡来物語』学風書院、東京

(付録) 動物の分類階級について

	オシドリ	ヤマドリ
門	脊椎動物門	脊椎動物門
綱	鳥綱	鳥綱
目	カモ目	キジ目
科	カモ科	キジ科
(亜科)	カモ亜科	キジ亜科
(族)	バリケン族	キジ族
属	オシドリ属	ヤマドリ属
種	オシドリ	ヤマドリ

動物の分類上の位置は、
 門－綱－目－科－(亜科)－(族)－属－種
 という階層構造であらわすしくみになっている。
 鳥はすべて脊椎動物門の鳥綱にふくまれ、鳥綱は
 26目157科9021種(山階芳麿 1987『世界鳥類和
 名辞典』による)に分類される。
 左にオシドリとヤマドリを例にとって分類階級
 上の名称を示す。

柿澤亮三(山階鳥類研究所)
 平岡 考(山階鳥類研究所)
 中坪禮治(日本鳥類保護連盟)
 上村淳之(京都市立芸術大学)

表1 材質の調査結果(中倉6箭付属の模造品)

宝物名	正倉院御物目録	明治27年御物整理目録	材質
矢第1号	雉山鳥尾50隻	雉風切雉尾 50隻(模造2隻)	キジ雄初列風切、キジ雄尾羽。
矢第2号	雁山鳥羽5拾隻	山鳥風切鷹母衣 50隻(模造2隻)	ヤマドリ初列風切、不明。
矢第3号	鷗羽雉尾36隻	雉尾鷗母衣 36隻(模造2隻)	キジ雄尾羽、クマタカ次列風切。
矢第4号	雉山鳥尾貳拾7隻	山鳥尾雉尾 27隻(模造2隻)	ヤマドリ雄尾羽、キジ雄尾羽。
矢第5号	鷗染羽50隻	母衣染羽 50隻(模造2隻)	クマタカ(?)次列風切。
矢第6号	雉山鳥尾69隻	雉尾山鳥尾 69隻(模造2隻)	キジ雄尾羽、ヤマドリ雄尾羽。
矢第7号	同拾4隻	雉尾山鳥尾 14隻(模造2隻)	キジ雄尾羽、ヤマドリ雄尾羽。
矢第8号	同貳拾貳隻	山鳥尾雉尾 22隻(模造2隻)	キジ雄尾羽、ヤマドリ雄尾羽。
矢第9号	鷗山鳥羽48隻	鷗母衣山尾(ママ)尾 48隻(模造2隻)	ヤマドリ雄尾羽、クマタカ次列風切。
矢第10号	山鳥尾50參隻	雉尾山鳥尾 53隻(模造2隻)	キジ雄尾羽、ヤマドリ雄尾羽。
矢第11号	雉染尾35隻	雉尾染 35隻(模造2隻)	キジ雄尾羽。
矢第12号	鷗染羽拾隻	鷗母衣染 10隻(模造2隻)	クマタカ次列風切。
矢第13号	雉羽9隻	雉風切 9隻(模造2隻)	キジ雄初列風切。
矢第14号	鷹羽山鳥尾50隻	鷹母衣山鳥尾 50隻(模造2隻)	ヤマドリ雄尾羽、不明。
矢第15号	山鳥尾46隻	山鳥尾 44(6)隻(模造2隻)	ヤマドリ雄尾羽。
矢第16号	鷗染尾47隻	鷗母衣染 47隻(模造2隻)	クマタカ次列風切。
矢第17号	雁羽5隻	鷹母衣 5隻(模造2隻)	不明。
矢第18号	雉尾54隻	雉風切雉尾 54隻(模造2隻)	キジ雄初列風切。キジ雄尾羽。
矢第19号	鶴羽11隻	鶴母衣元白小羽白鳥雪洞 11隻(模造2隻)	タンチョウまたはコウノトリ次列風切。雪洞不明。
矢第20号	鶴羽白鳥染羽18隻	鶴母衣元白雪洞白鳥染 18隻(模造2隻)	タンチョウまたはコウノトリ次列風切。雪洞不明。
矢第21号	隼尾18隻	隼尾 18隻(模造2隻)	シロハヤブサ(?)尾羽。
矢第22号	鷹羽小鳥染羽34隻	鷹尾雪洞白鳥小羽染 34隻(模造2隻)	オオタカ尾羽、雪洞不明。
矢第23号	鷹尾小鳥染羽6隻	鷹尾雪洞小羽白鳥染 6隻(模造2隻)	オオタカ尾羽、雪洞不明。
矢第24号	雉山鳥尾32隻	雉風切丸羽雪洞山鳥尾 32隻(模造2隻)	キジ雄初列風切。雪洞ヤマドリ尾羽。
矢第25号	黄染大鷹羽9隻	大鷹黄染 9隻(模造2隻)	不明。
矢第26号	隼尾4隻	鷹隼尾貝方雪洞雉尾 4隻(模造2隻)	不明。
矢第27号	大鷹尾5隻	大鷹尾三斑(みふ) 5隻(模造2隻)	オオタカ尾羽。
矢第28号	鶴羽1隻大鷹尾壹隻	鶴元白大鷹尾 2隻(模造2隻)	タンチョウまたはコウノトリ次列風切、オオタカ尾羽、雪洞ヤマドリ尾。
矢第29号	大鷹羽5隻	大鷹尾 5隻(模造2隻)	オオタカ尾羽。
矢第30号	大鷹羽5隻	大鷹白雪洞 5隻(模造2隻)	オオタカ尾羽。
矢第31号	鶴羽拾5隻	鶴元白1隻雪洞付 16隻(模造2隻)	タンチョウまたはコウノトリ次列風切。
矢第32号	雉大鷹羽2隻	雉風切御射ヅリ向大鷹石打 2隻(模造2隻)	キジ雄初列風切。
矢第33号	鶴羽2隻	鶴元白貝方付 2隻(模造2隻)	タンチョウまたはコウノトリ次列風切。
矢第34号	雉羽2隻	雉風切雪洞 2隻(模造2隻)	キジ雄初列風切、雪洞不明。
矢第35号	鷗雌尾11隻	クマタカメン(雌)尾 13隻(模造2隻)	クマタカ幼鳥尾羽。
矢第36号	黄染白鳥羽45隻	白鳥黄染 45隻(模造2隻)	不明。
矢第37号	山鳥尾50隻	山鳥尾 50隻(模造2隻)	ヤマドリ雄尾羽。
矢第38号	鷗羽10隻	クマタカ母衣 10隻(模造2隻)	クマタカ次列風切。
矢第39号	大鷹尾49隻	大鷹尾 49隻(模造2隻)	オオタカ尾羽。
矢第40号	雉羽39隻	雉尾丸羽 39隻(模造2隻)	キジ雄尾羽。古い矢はキジ雌尾羽。
矢第41号	鶴染羽玉虫飾17隻	鶴染青黄染赤元矧青雪洞 27隻(模造2隻)	不明。
矢第42号	同 4隻	鶴元白赤青黄染 4隻(模造2隻)	不明、雪洞カケス雨覆。
矢第43号	鷗雌雄染羽玉虫飾7隻	鷗メン尾雪洞カケス射ヅリ向羽クマタカヲン小母衣 7隻(模造2隻)	クマタカ幼鳥尾羽、雪洞カケス雨覆。
矢第44号	鷗羽山鳥尾48隻	クマタカ小母衣射ヅリ向山鳥尾 48隻(模造2隻)	ヤマドリ雄尾羽、クマタカ次列風切。
矢第45号	山鳥尾46隻	山鳥尾2枚羽 46隻(模造2隻)	ヤマドリ雄尾羽。
矢第46号	雉尾54隻	雉風切丸羽 54隻(模造2隻)	キジ雄初列風切。
矢第47号	鶴羽49隻	コウ(鴻)元白 49隻(模造2隻)	タンチョウまたはコウノトリ次列風切。
矢第48号	鶴染羽49隻	鶴元白黄染 49隻(模造2隻)	不明。
矢第49号	雉羽46隻	雉風切丸羽矧 46隻(模造2隻)	キジ雄初列風切。
矢第50号	雉尾50隻	雉尾赤3枚羽 50隻(模造2隻)	キジ雄尾羽。

宝 物 名	正倉院御物目録	明治27年御物整理目録	材 質
矢第51号	大鷹尾43隻	大タカ尾 43隻(模造2隻)	不明。
矢第52号	山鳥尾44隻	山鳥尾 44隻(模造2隻)	ヤマドリ雄尾羽。
矢第53号	同 48隻	山鳥尾 46隻(模造2隻)	ヤマドリ雄尾羽。
矢第54号	大鷹羽50隻	クマタカ母衣 50隻(模造2隻)	クマタカ次列風切。
矢第55号	雉尾43隻	雉尾 43隻(模造2隻)	キジ雄尾羽。
矢第56号	羽貳12隻	クマタカ母衣 22隻(模造2隻)	クマタカ次列風切。
矢第57号	鶇大鷹尾16隻	大タカ尾貝方 16隻(模造2隻)	オオタカ尾羽。
矢第58号	鶴羽14隻	コウ母衣 14隻(模造2隻)	不明。
矢第59号	鶴羽8隻	ツル元白貝方 8隻(模造2隻)	タンチョウまたはコウノトリ次列風切。
矢第60号	雉尾12隻	雉尾 12隻(模造2隻)	キジ雄尾羽。
矢第61号	大鷹尾3隻	大タカ尾 3隻(模造2隻)	オオタカ尾羽。
矢第62号	鶇羽2隻	クマタカ母衣 2隻(模造2隻)	クマタカ次列風切。
矢第63号	大鷹羽3隻	クマタカ母衣1隻 白鳥黄染1隻 6隻(模造2隻)	クマタカ次列風切。
矢第64号	白鳥黄染羽3隻	膺母衣 66隻(模造2隻)	不明。
矢第65号	雁羽蘆幹竹織66隻	膺羽母衣 50隻(模造2隻)	不明。
矢第66号	同 50隻	大タカメン尾黄染 19隻(模造2 隻)	不明。
矢第67号	黄染大鷹尾19隻	膺母衣 雁羽 12隻(模造2隻)	不明。
矢第68号	雁羽蘆幹骨織12隻	コウ黒母衣 7隻(模造2隻)	不明。
矢第69号	鶴羽蘆幹骨織7隻	子ヅミ白鳥風切り 1隻(模造1 隻)	不明。
矢第70号	白鳥羽1隻	各種?竹木織 10隻	不明。
矢第71号	雑箭10隻	各種 34隻	模造なし。
矢第72号	同 34隻	各種 21隻	模造なし。

(注)キジは尾羽の色彩とパターンから日本産のいわゆるニホンキジ*Phasianus versicolor*と考えられる。

(注)ヤマドリ*Symaticus soemmerringii*はいずれも亜種キタヤマドリ*S. s. scintillans*と考えられる。

表2 材質の調査結果(箭以外)

倉別番号	宝 物 名	材 質
北44	鳥毛篆書屏風6扇	キジ雄(肩羽)、キジ雌(肩羽、体羽)、ヤマドリ(体羽)、マガモ属(体羽)、不明。
北44	鳥毛立女屏風6扇	不明。
北44	鳥毛立女屏風接扇其他残闕	キジ雄(肩羽)
北44	鳥毛帖成文書屏風6扇	キジ雄(肩羽)、キジ雌(肩羽、雨覆、体羽)、不明。
南69	屏風2扇	不明。
中117	彩絵水鳥形2枚	カケス初列雨覆。
南174	羽箒1枚	大型鳥類の翼。
南174	目録外の鳥3点	鳥の腰帯。鳥の合仙骨付近の破片。哺乳類の脚。

(注)鳥毛帖成文書屏風、鳥毛篆書屏風、鳥毛立女屏風接扇其他残闕のキジは、雄の肩羽の模様から日本産のいわゆるニホンキジ*Phasianus versicolor*である。

表3 文様の調査結果

倉別番号	宝物名	鳥名
北13	紅牙撥縷尺 甲	【目盛のある面】 想像上の鳥(鳳凰)、サンジャクB、小禽類A、カモ科A、【目盛のない面】 サンジャクB、ヤツガシラA、カモ科A、オシドリA(雄雄)
北13	紅牙撥縷尺 乙	【目盛のある面】 小禽類A、想像上の鳥(鳳凰)、オシドリA(雄雄)、サンジャクB、カモ科A、オシドリA(雄雄)、【目盛のない面】 オシドリA(雄雄)、カモ科B(ハト科C)、カモ科A、オシドリA(雄雄)、ヤツガシラA、カモ科A
北14	緑牙撥縷尺 甲	【目盛のある面】 小禽類A、カモ亜科A、カモ科A、ヤツガシラA、小禽類A、オシドリA(雄雄)、小禽類A、【目盛のない面】 不明鳥(大型)、想像上の鳥(鳳凰)、サンジャクB、小禽類B、ヤツガシラA
北14	緑牙撥縷尺 乙	【目盛のある面】 カモ亜科A、オシドリA(雄雄)、小禽類A、【目盛のない面】 ヤツガシラA、カモ亜科A、サンジャクB、オシドリA
北25	銀平脱合子	ホンセイインコ属A
北25	紅牙撥縷碁子	ヤツガシラA
北25	紺牙撥縷碁子	カモ亜科A(アカツクシガモC)
北26	金銀平文琴	【龍額より】 ツル属A(タンチョウC、クロツルC)、カモ亜科A(マガモC、雌雄)、ツル属A、想像上の鳥(鳳凰)、カモ亜科B、不明鳥(サンジャクC、キンケイC)、小禽類A、キジ族A(キンケイC)、カモ亜科B、オシドリB-C、キジ族A、ツル属A、マクジャクA、中型鳥B、キジ族B(サンジャクC)、中型鳥A(タゲリC)、不明鳥(サンジャクC、キジ族C)、ヤツガシラB、小禽類A、オシドリB-C、ヤツガシラB、オシドリB-C、キジ族A(キンケイC)、カモ亜科A、キジ族A(キンケイC)、小禽類A、不明鳥(カモ亜科C)、ツル属B、小禽類A、オシドリB-C、キジ族A(キンケイC)、不明鳥(サンジャクC)、不明鳥(キンケイC、サンジャクC)、不明鳥(オシドリC)、カモ亜科B、【礎】 小禽類A、不明鳥(サンジャクC)、ツル属B、小禽類A、不明鳥(キンケイC、サンジャクC)、ツル属B、中型鳥A(シラサギ属C)、不明鳥(ヤツガシラC)、不明鳥(サンジャクC)、ツル属B、カモ亜科B、中型鳥B、ツル属B、不明鳥(オシドリC)、カモ亜科B
北27	螺鈿紫檀琵琶	【槽、鹿類よりから】 小禽類A、オシドリ(雄)A、カモ科A(オシドリ雌B)、小禽類A
北28	紅牙撥縷撥	【先端に一角馬頭の鳥のある側】 想像上の鳥(一角馬頭で有翼、二足で偶蹄)、オシドリA、小禽類A、小禽類A(ホオジロ科C、雌雄?)、【先端に四足獣のある側】 キンケイA、カモ亜科A、オシドリA
北29	螺鈿紫檀五絃琵琶	【捍撥、上部より】 カモ科A、ホンセイインコ属B、不明鳥(カモ科C、カワセミ科C)、【礎、鹿類よりから】 小禽類A(スズメ属C)、小禽類A(スズメ属C)、小禽類A(スズメ属C)、【落帯】 小禽類A(サンショウクイ属C)、【槽】 ホンセイインコ属A
北30	螺鈿紫檀阮咸	【槽】 ホンセイインコ属B
北36	木画紫檀碁局	【側面】 ホンセイインコ属A、カモ亜科A、ホンセイインコ属B、キジ族A(タイリクキジB)、ホンセイインコ属A、【脚部】 小禽類A(スズメC)
北37	木画紫檀双六局	【側面】 小禽類A、カモ亜科A(アカツクシガモC)、【脚部】 ヤツガシラA
北42	鳥獸花背八角鏡 第1号	【内区】 想像上の鳥(鳳凰)、【外区】 カモ亜科A(オシドリB)、インコ科A(ホンセイインコ属C)、カモ亜科C
北42	鳥花背円鏡 第2号	【内区】 マクジャクA、オシドリA、【外区】 想像上の鳥(鳳凰)
北42	鳥花背八角鏡 第3号	想像上の鳥(鳳凰)
北42	平螺鈿背八角鏡 第7号	不明鳥(サンジャクC、チメドリ科C)
北42	平螺鈿背円鏡 第11号	小禽類A(スズメC)
北42	漆背金銀平脱八角鏡 第12号	想像上の鳥(鳳凰)、オシドリA、カモ亜科A(オシドリC)、小禽類A、ツル属A
北42	平螺鈿背八角鏡 第13号	サンジャクC、カモ亜科A
北42	漆皮箱	サンジャクC
北42	花鳥背八角鏡 第14号	ホンセイインコ属B
北42	雲鳥背円鏡 第17号	ツル属A、想像上の鳥(鳳凰)
北42	山水花虫背円鏡 第18号	カモ亜科A、オシドリA、オシドリB-C、ヤツガシラA、小禽類A、サンジャクB
北43	漆胡瓶	【蓋】 小禽類A、サンジャクB、【身、蓋直下】 オシドリA、ヤツガシラA、【胴の上部】 ヤツガシラA、オシドリA、【胴の中部】 カモ亜科A-B、【胴の下半】 カモ亜科A-B、ヤツガシラA、【脚】 オシドリA、カモ亜科B(オシドリC)
北44	鳥毛篆書屏風 第1扇	ホンセイインコ属C、サンジャクC、ヤツガシラA
北44	鳥木石夾額屏風 第1扇	キジ族A(キンケイC)
北44	鳥木石夾額屏風 第2扇	キジ族A(キンケイC)
北44	鳥草夾額屏風 第2扇	キンケイB
北44	鳥草夾額屏風 第3扇	【上から】 ツバメ科B、小禽類A、キンケイB、小禽類A
北44	鷹額屏風 第2号(鸚鵡武屏風)	サンジャクB(キンケイC)
北44	鷹額屏風 第4号(熊鷹屏風)	クマクカ属A(長い冠羽あり大陸産)
北45	指布屏風袋 第1号	マクジャクA、ヤツガシラA
北47	御拭 第1号	想像上の鳥(鳳凰)
北47	御拭 第2号	【底裏】 カモ亜科A(オシドリC)
北150	花氈 第5号	サンジャクA
北153	銀薫炉	想像上の鳥(鳳凰)
北154	銀平脱合子	【蓋上面】 オシドリA、サンジャクC、ヤツガシラA、【蓋側面、身側面】 オシドリB-C、ヤツガシラA、サンジャクC
北157	礼服御冠残闕	想像上の鳥(鳳凰)

倉別番号	宝物名	鳥名
北182	白地花鳥文錦 第8～11号	不明鳥(尾が長く飛ぶ)
北182	赤地鳳凰唐草丸文縹緞 第47号	想像上の鳥(鳳凰)
北182	縹地唐草花鳥文夾縹緞 第48号	カモ亜科A
北182	茶地花樹鳳凰文縹緞 第52号	想像上の鳥(鳳凰)
北182	浅緑地花鳥文縹緞 第59号	鳥かどうか不明
北182	樹下鳳凰双羊文白綾 第68号	インコ科B(脚短く嘴曲がる)、水禽類B(カモ亜科C)
中12	馬鞍 第5号	【履脊】 ヤツガシラA、サギ科A、不明鳥、【鞍褥】 インコ科B
中12	馬鞍 第6号	【履脊】 ヤツガシラA、カモ亜科A、不明鳥、【鞍褥】 オシドリA
中12	馬鞍 第7号	【鞍褥】 想像上の鳥(鳳凰)
中12	馬鞍 第9号	【履脊】 想像上の鳥(鳳凰)
中45	絵紙	【1号の21】 不明鳥(ツバメ科C、インコ科C)
中46	吹絵紙 第1号	サンジャクB、ツル属B
中51	紅牙撥鏝尺 第1号	【目盛のある面】 オシドリA、カモ亜科A、【目盛のない面】 ツル属A、小禽類A、サンジャクB、小禽類A、ヤツガシラA、オシドリA、カモ亜科A
中51	紅牙撥鏝尺 第2号	【目盛のある面】 小禽類A、カモ亜科A、オシドリA、ヤツガシラA、【目盛のない面】 サンジャクB、小禽類A、カモ亜科A
中51	紅牙撥鏝尺 第3号	【目盛のある面】 カモ亜科A、小禽類A、オシドリA、カモ亜科A、不明鳥(水禽類C)、【目盛のない面】 ツル属B、カモ亜科A
中51	紅牙撥鏝尺 第4号	【文様が横並びの面】 ツル属A(タンチョウC、クロツルC)、オシドリA(雌雄)、オシドリA(雄雄)、オシドリA(雌雄)【文様が縦並びの面】 オシドリA(雌雄)、オシドリA(雌雄)、オシドリ雄A、カモ亜科A(オシドリ雌C)、オシドリ雄A
中57	最勝王経帙	想像上の鳥(迦陵頻伽)
中117	彩絵水鳥形 2枚	ヤツガシラA
中137	金銀絵漆皮箱 第3号	【蓋側面】 小禽類A、【身側面長側】 小禽類A、ヤツガシラA、【身側面短側】 小禽類A
中138	金銀平脱皮箱 第4号	【蓋側面】 インコ科A(尾が特異)、【身側面】 インコ科B(尾が特異)、【蓋上面】 想像上の鳥(鳳凰)、カモ亜科A(オシドリC)
中142	沈香木画箱 第10号	【長側】 カモ亜科A(オシドリC)、小禽類A、【長側その2】 カモ亜科A(オシドリC)、【短側、脚】 不明鳥(ハト科C、カモ亜科C)、【蓋】 カモ亜科A(オシドリC)
中143	密陀彩絵箱 第14号	【蓋上面】 想像上の鳥(鳳凰)、想像上の鳥(大きく開いた口に歯、火炎様の息を吐く)
中143	密陀彩絵箱 第15号	【蓋長側】 カモ亜科A(オシドリC)、【身長側】 オシドリA、小禽類A、サンジャクC、【蓋上面】 想像上の鳥(鳳凰)、【蓋短側】 カモ亜科A(オシドリC)、【身短側】 不明鳥(ホンセイインコ属C)、小禽類A
中145	紫檀木画箱 第18号	【蓋上面】 小禽類A、ヤツガシラA、カモ亜科A、【蓋長側】 小禽類A、カモ亜科A、【身長側】 カモ亜科A、【蓋短側】 カモ亜科A、【身短側】 カモ亜科A、小禽類A
中146	瑠璃螺鈿八角箱 第19号	【蓋上面】 オシドリA、カモ亜科A(オシドリB-C)、【蓋側面】 オシドリA、小禽類A(スズメC)
中151	碧地金銀絵箱 第24号	【蓋上面】 水禽類A(カモ亜科C、ウ科C)、ヤツガシラA、【蓋短側・長側】 不明鳥(サンジャクC)、【身短側・長側】 不明鳥(サンジャクC)
中151	碧地金銀絵箱 第25号	【蓋上面】 ホンセイインコ属B、小禽類A(サンジャクC)、【長側、蓋】 ヤツガシラC、【長側、蓋その2】 小禽類A(サンジャクC)【長側、身】 小禽類A、ヤツガシラA、不明鳥(インコ科C、サンジャクC)、【長側、身その2】 ヤツガシラA、不明鳥(インコ科C、サンジャクC)、小禽類A(ホンセイインコ属C)、【短側、蓋】 ヤツガシラC、【短側、蓋その2】 ヤツガシラC、【短側、身】 小禽類A(ホンセイインコ属C)、ヤツガシラA
中152	蘇芳地金銀絵箱 第26号	【身長側・蓋上面】 想像上の鳥(植物文様に頭部があり全体として鳥のように見える)、【身裏】 インコ科A
中152	蘇芳地金銀絵箱 第27号	【蓋上面】 小禽類A(スズメC)、【身長側】 ホンセイインコ属C、水禽類A(カモ亜科C、ウ科C)、【身裏】 想像上の鳥(鳳凰)、サンジャクC
中152	蘇芳地金銀絵箱 第28号	【蓋上面】 インコ科A、不明鳥(サンジャクC)、カモ亜科B、ツル属A、ヤツガシラA、小禽類A、【身長側】 シャコ族B、
中154	黄楊木金銀絵箱 第30号	【蓋上面】 小禽類A(スズメC)、【短側】 サンジャクC、【長側】 小禽類A(スズメC)
中170	投壺	小禽類A(尾の長いもの(サンジャクC、サンコウチョウC)、小禽類A(尾の短いもの)
中172	紫檀木画双六局 第3号	【長側】 カモ亜科A、カモ亜科A(マガモC)、【短側】 カモ亜科A(マガモC)
中175	金銀絵碁子合子 第1号	【蓋】 不明鳥(サンジャクC、インコ科C)
中175	金銀絵碁子合子 第2号	【蓋】 不明鳥(サンジャクC)
南13	銀壺 甲	キジ族B-C、カモ亜科B-C、サギ科A
南13	銀壺 乙	キジ族B-C、カモ亜科B-C、想像上の鳥(嘴はワシのようにカギ型、足にミズカキ、全体にカモ亜科を思わせる)
南37	漆金薄絵盤 甲	【1-1】 水禽類A(カモ亜科C)、【1-3】 オシドリA、【1-5】 水禽類A(カモ亜科C)、【2-1】 想像上の鳥(迦陵頻伽)、【2-4】 カモ亜科A、【2-5】 想像上の鳥(迦陵頻伽)、【2-6】 水禽類A、【2-7】 オシドリA、【3-1】 想像上の鳥(鳳凰)、【3-3】 想像上の鳥(鳳凰)、【3-5】 オシドリA、【3-7】 水禽類A(カモ亜科C)、【4-2】 想像上の鳥(鳳凰)、【4-5】 水禽類A、【4-8】 想像上の鳥(迦陵頻伽)
南37	漆金薄絵盤 乙	【3】 オシドリA、【4】 想像上の鳥(鳳凰)、【7】 オシドリA、【8】 想像上の鳥(鳳凰)、【10】 想像上の鳥(迦陵頻伽)、【11】 オシドリA、【14】 想像上の鳥(鳳凰)、【15】 オシドリA、【16】 オシドリA、【17】 想像上の鳥(迦陵頻伽)、【18】 想像上の鳥(迦陵頻伽)、【19】 想像上の鳥(鳳凰)、【20】 水禽類A(カモ亜科C)、【22】 想像上の鳥(鳳凰)、【24】 オシドリA、【25】 想像上の鳥(迦陵頻伽)、【26】 想像上の鳥(迦陵頻伽)、【28】 水禽類A(カモ亜科C)、【30】 想像上の鳥(鳳凰)、【32】 オシドリA

倉別番号	宝物名	鳥名
南39	密陀絵盆 第3号	ホンセイインコ属B
南39	密陀絵盆 第9号	マクジャクA
南39	密陀絵盆 第12号	オシドリA、小禽類A(ツバメ科C)
南39	密陀絵盆 第13号	サギ科A(シラサギ属B)
南39	密陀絵盆 第14号	水禽類A(オシドリC)、ヤツガシラA、不明鳥(サンジャクC)
南39	密陀絵盆 第16号	ツル属A、水禽類A(ガン亜科C)
南51	犀角如意	【腹】小禽類A、オシドリA、不明鳥(キジ族C)、ヤツガシラA、カモ亜科A(ヤツガシラとよく似たバタン)、小禽類A、【背】小禽類A、ヤツガシラA、カモ亜科A、インコ科A、小禽類A
南70	金銀山水八卦背八角鏡 第1号	カモ亜科B、想像上の鳥(鳳凰)、水禽類B(太った鳥、ウミスズメ科C、シャコ族C)、ツル属A、中型鳥A(尾が長い、サンジャクC、バンケンC、オウチュウC)、マクジャクA、インコ科A、オシドリA、小禽類A、小禽類A(尾が長い)
南70	鳥獣花背円鏡 第3号	【内区】想像上の鳥(鳳凰)、【外区】インコ科A、カモ亜科A、キジ族A(キンケイC)、小禽類A
南70	山水鳥獣背円鏡 第4号	オシドリA、オシドリB-C、オシドリB-C(鹿の角あり)、オシドリB-C(兎の耳あり)
南70	平螺細背円鏡 第5号	カモ亜科A
南70	銀平脱箱	カモ亜科A
南70	鳥獣花背円鏡 第7号	想像上の鳥(鳳凰)、オシドリA、小禽類A
南70	鳥獣花背円鏡 第8号	【内区】不明鳥(尾が長い、インコ科C)、不明鳥、【外区】小禽類A(燕尾)、不明鳥、小禽類A(インコ科C)、ガン亜科B、小禽類A、インコ科B、インコ科C
南70	鳥獣花背円鏡 第9号	【中間】小禽類A、インコ科A、中型鳥A、ヤツガシラA、インコ科A、中型鳥A、中型鳥(尾が長い)A、中型鳥A、【外区】オシドリA、マクジャクB、ニワトリA(雄、雌、ヒヨコ各1)、想像上の鳥(鳳凰)
南70	方鏡 第10号	【外区】小禽類A、中型鳥(尾が長い)A、小禽類A(尾が長い)A、中型鳥A、小禽類A、インコ科B
南70	鳥獣花背八角鏡 第12号	【内区】想像上の鳥(鳳凰)、【中間】オシドリA、ヤツガシラB-C、【外区】サンジャクC、小禽類C
南70	十二支八卦背円鏡 第13号	想像上の鳥(朱雀=鳳凰)、ニワトリA
南71	銀平脱八角鏡箱 第1号	マクジャクB(図案化進む)
南71	銀平脱鏡箱 第2号	【蓋上面】オシドリA、【身裏面】ツル属A、カモ亜科A
南71	漆皮八角鏡箱 小 第4号	【蓋上面】カモ亜科A(オシドリC)、【蓋側面】サンジャクC
南101	楓蘇芳染螺細槽琵琶 第1号	【鹿類】小禽類A、【捍撥】水禽類A(カワウC、ガン亜科C)、【覆手】小禽類A、【落帯】カモ亜科A、【槽】小禽類A
南101	紫檀木画槽琵琶 第2号	【槽】オシドリA、カモ亜科A、ヤツガシラA、サンジャクB-C、
南101	紫檀木画槽琵琶 第4号	【捍撥】ハヤブサ科A、マガモB
南108	銀平脱竿 第1号	小禽類A
南130	袍袖 第1号	不明鳥
南134	赤地錦半臂 第1号	オシドリA
南134	夾纈羅半臂 第7号	不明鳥
南134	曝布彩絵半臂残闕 第9号	【前身頃】ガン亜科A(嘴基部が太い)、ホンセイインコ属B、キンケイA、【後身頃】オシドリA
南148	赤地鳳凰唐花文縹緞 第29号	想像上の鳥(鳳凰)
南148	緑地花鳥文縹緞 第32号	不明鳥
南148	双鳥唐花文紫綾 第64号	カモ亜科B(ガン亜科C)
南150	紺夾縹緞几褥 第14号	カモ亜科A(マガモC)、オシドリB
南150	赤紫縹緞几褥 第26号	オシドリA、カモ亜科B(オシドリC)
南150	白樟綾錦几褥 第30号	マクジャクA
南156	金銅幡 第3号	オシドリA
南163	金銅鳳凰形裁文	想像上の鳥(鳳凰)
南165	金銅幡残闕 第1号	想像上の鳥(鳳凰)
南165	金銅水鳥形 第17号	ヤツガシラA
南165	雜葛形裁文 第27号	オシドリA
南168	漆櫃(雲鳥草形)	【身長側】ツル属A、【身短側】ツル属A、【身短側その2】小禽類A、ツル属A(ディスプレイ)
南168	漆櫃(竜虎形)	【身短側】カモ亜科B、【身短側その2】キジ族B(サンジャクC)
南170	赤漆櫃(雲兎形)	【身短側】マクジャクB
南179	緑地狩狐文錦 第91号	中型鳥A(サンジャクC)
南180	孔雀文刺繡幡残闕 第1号	マクジャクA
南180	大幡脚端飾 第8号	オシドリA
南185	白地花鳥文夾縹緞 126号櫃雑25	不明鳥(サンジャクC、インコ科C)

A=確実、B=可能性が大きい、C=可能性がある

表4 文様に認められる鳥種

目	科	同定内容	備 考
ペリカン目	ウ科	ウ科C	
		カワウC	
コウノトリ目	サギ科	サギ科A	
		シラサギ属B, C	サギ科のうちおもに白いサギの仲間。コサギ、ダイサギなどを含むグループ。
カモ目	カモ科	カモ科A, B, C	
		ガン亜科A, B, C	カモ科のうち、ガンの仲間。比較的大型で頸が長い。マガン、ヒシクイなどを含むグループ。
		カモ亜科A, A-B, B, B-C, C	カモ科のうち、カモの仲間。比較的小型。オシドリ、マガモ、アカツクシガモなどを含むグループ。
		アカツクシガモC	
		オシドリA, B, B-C, C	
		マガモB, C	
タカ目	タカ科	クマタカ属A	
	ハヤブサ科	ハヤブサ科A	
キジ目	キジ科	シャコ族B, C	キジ科のうち、ユーラシア産の尾の短くないぐりとした仲間。ウズラ、シャコなどを含むグループ。
		キジ族A, B, B-C, C	キジ科のうち、概して尾が長く美しい羽毛をもつ仲間。キンケイ、ニワトリ、キジ、クジャクなどを含むグループ。
		ニワトリA	
		タイリクキジB	
		キンケイA, B, C	
		マクジャクA, B	
ツル目	ツル科	ツル属A, B	ツル科のうち、カンムリツル属、アネハヅル属、ホオカザリツル属をのぞく典型的なツルの仲間。タンチョウ、クロヅル、マナヅルなどを含むグループ。
		タンチョウC	
		クロヅルC	
チドリ目	チドリ科	タゲリC	
	ウミスズメ科	ウミスズメ科C	
ハト目	ハト科	ハト科C	
オウム目	インコ科	インコ科A, B, C	
		ホンセイインコ属A, B, C	
カッコウ目	カッコウ科	バンケンC	
ブッポウソウ目	カワセミ科	カワセミ科C	
	ヤツガシラ科	ヤツガシラA, B, B-C, C	
スズメ目	ツバメ科	ツバメ科B, C	
	サンショウクイ科	サンショウクイ属C	
	チメドリ科	チメドリ科C	
	ヒタキ科	サンコウチョウC	
	ホオジロ科	ホオジロ科C	
	ハタオリドリ科	スズメC	
		スズメ属C	
	オウチュウ科	オウチュウC	
カラス科	サンジャクA, B, C		
その他		水禽類A, B, C	ここではおもに遊泳性の水鳥を総称する。アビ科、ウ科、ガン亜科、カモ亜科などを含む。
		中型鳥A, B	ここでは体の大きさがおおむねハトからカラスくらいまでの陸棲の鳥を総称する。
		小禽類A, B, C	ここでは体の大きさがおおむねスズメからツグミくらいまでの陸棲の鳥を総称する。スズメ目の鳥のほとんどと、非スズメ目の小型の陸棲鳥を含む。
		不明鳥	
想像上の鳥		鳳凰(朱雀)	
		迦陵頻伽	
		(名称不明)	一角馬頭で有翼、二足で偶蹄。
		(名称不明)	植物文様に頭部があり全体として鳥のように見える。
		(名称不明)	大きく開いた口に歯があり、火炎様の息を吐く鳥。
(名称不明)	嘴はワシのようにカギ型、足に蹠、全体にカモ亜科を思わせる鳥。		

A=確実、B=可能性が大きい、C=可能性がある